

こむぎ通信

令和8年2号

赤かび病の防除を徹底しましょう！

出穂期は平年より早い状況となっています。

赤かび病の防除は開花始め～開花期に1回目、
その7日後に2回目を行いましょう。

1 生育状況

県生育観測ほは、草丈は平年より19.8cm長く、㎡当たり茎数は平年より105本少ない。また、出穂期は平年より6日早い5月14日、開花期は8日早い5月19日であった。

地区生育観測ほは、草丈は75.4cmで平年より21.7cm長く、㎡当たり茎数は767本で平年より188本多い。

地域全体をとおして、うどんこ病、赤さび病の発生は少ない。

表1

生育調査結果

品種：ネバリゴシ

地点名	年度	5月11日		生育ステージ	
		草丈 (cm)	茎数 (本/㎡)	出穂期	開花期
県生観	本年	73.7	769	5月14日	5月19日
十和田市	平年	53.9	874	5月20日	5月27日
相坂	平年差・比	137%	88%	6日早	8日早
地区生観	本年	75.4	767	5月14日	5月19日
十和田市	平年	53.7	579	5月21日	5月28日
赤沼	平年差・比	140%	132%	7日早	9日早

※平年は、県生観：平成23年～令和7年産、地区生観：平成19年～令和7年産の平均値

2 防除対策

【うどんこ病】

(1) うどんこ病は、発生初期と7～10日後の2回、薬剤散布を行う。特にネバリゴシはうどんこ病に弱いので、蔓延させないよう発生状況に注意する。

(2) うどんこ病の薬剤散布を1回とした場合は、止葉直下葉での発生直後に表2の薬剤を散布すると効果的に抑えることができ、収量・品質低下に対する影響も小さくなる。

【赤かび病】

- (1) 赤かび病が発生するカビ毒に汚染されると出荷流通停止となることから、本病に対する防除を徹底する。
- (2) 赤かび病は出穂期～乳熟期にかけて降雨や濃霧が続くと発生しやすいので、開花始め～開花期に1回目、その7日後に2回目の薬剤を散布する。赤かび病の発生源の一つである紅色雪腐病の発生が認められたほ場では薬剤防除を徹底する。



- (3) ベンゾイミダゾール系、QoI 剤は、うどんこ病及び赤かび病に対し耐性菌が出やすいので連用しない。特に紅色雪腐病の発生したほ場ではベンゾイミダゾール系剤は使用しない。

【注意事項】

- (1) うどんこ病等の対策としてアミスター20フロアブルを散布した場合、かび毒の産生量を増加させた事例があるので、出穂後は使用しない。
- (2) 刈り遅れは、かび毒の産生を助長する原因となることから、適期収穫を確実に行う。

表2 系統別防除薬剤一覧

薬剤系統名	薬剤名	対象病害	
		赤かび病	うどんこ病
DMI 剤	シルバキュアフロアブル	○	○
	トリフミン水和剤	○	○
	ワークアップフロアブル	○	○
QoI 剤	ストロビーフロアブル	○	○
	アミスター20フロアブル		○
ベンゾイミダゾール系	トップジンM水和剤	○	○

※対象病害欄の○は登録ありを示す。

★農薬を使用する際には、必ず最新の農薬登録情報を確認してください★